

=====

## <今日の伝言>

### ◆ 蓮舫さんから

## 失意泰然。私はこれからも声を上げ続けます



応援して下さった声に応えられず、申し訳ありませんでした。日々、街頭演説に集まってくれる方が増え、私の訴えに呼応して下さる声が高まっていたこと。それは私の力になっていました。心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。変わる、変えられるとお互いが思いあえる選挙戦だったと思います。結果を出せなかったことは、ただ私の力不足によります。私に足りなかったものを猛省し、足らざるものをこれから勉強していきたいと思います。今の私の立場で言えたことではないかもしれませんが、お願いがあります。政治はやはり変わらないと諦めないでください。今回は私の力がなかっただけです。ひとり1人が信じて動けば。その熱量が高まれば高まるほど、必ず政治が変わる時がくと私は信じています。失意泰然。私はこれからも、声を上げ続けます。

### ◆ 編集子から

## いやあ、くたびれたなあ！

## タヌキとキツネに騙されたような こんな結果が待っていたとはねえ

ともかくにも心をつないで奮闘し合ったみなさん、お疲れさまでした

連日お騒がせをしては、みなさんのがんばりとねばりを「伝言」しあってきましたがマスコミのみなさんが「仕組んだ？」通りの結果を許してしまい、何とごあいさつするかに苦しんでいます。しかし、苦しんでも何にもなりませんから、編集子からのくりごとを呈して、新しい段階に足を踏み出すきっかけにさせていただきます。

### ●市民と野党の共闘は大きな流れをつくったよねえ！

自民党政治の裏金づくり・脱税による金権・腐敗を許さない世論と手を携えて「市民と野党の共闘」は、幾多の妨害と困難を乗り越えてきました。金権・腐敗勢力は、その利権を守るために、世界の戦禍を利用して防衛費倍増、経済・社会の軍事化、市民と野党の抵抗を抑え込む法改悪を重ねていますが、それがもたらすくらしと福祉の破壊が国民の怒りを高め、内閣支持率は1割台に低迷しています。

都知事選を控えた市民と野党の共闘は、半年がかりで政策づくりと候補者選定を重ねて、蓮舫候補とその7つの約束を軸に、新しいピラミッドをつくり、金権・腐敗の自民党と持ちつ持たれつの小池都政を厳しく包囲しました。マスコミが流す「小池百合子支

持率6割」という世論操作を抑えて、その得票率を42%に抑え込むという大きな流れは、こうして私たちが形成したものだという確信をまず共有しておきましょう。

## ●この流れをタヌキとキツネがさえぎった！

従来からも自民・公明与党と距離を置くかのようにふるまう都民ファースト・維新・国民民主などが「あいまいな与党連合」という欺瞞をふりまいてきました。今回の都知事選でも、小池陣営は、地方自治体の長たちを脅しての出馬要請、自民党隠しの支援体制、本人隠しの「AI百合子」（これはだれがどんなお金を使って動かしたのでしょうか？）、候補者討論の拒否など、タヌキのような化かし作戦が露骨でした。

これに加えて今回は「石丸現象」と呼ばれる欺瞞が登場しました。SNS世界がもたらす「道ならぬ若者世論づくり」にはキツネにつままれたような気分を覚えました。目良誠二郎さんという方がそのFBで『「石丸現象」をどう読み解くか』として述べておられることに共感しましたので、以下に勝手に引用させていただきます。

『実は、若い世代を蓮舫支持に向かわせないために、石丸を担ぎ出したのは安倍自民党系の「選挙の神様」や財界の老人たちだった。載せた側も驚くほどの成功だったろう。載せられた若い世代も驚く結果だったろう。中身は驚くほどゼロだったのだが、手法は正に驚くほどの中、成功したのだ。蓮舫さんとそれを支持した、自分も含めた側に必要な反省と総括は、基本的には中身ではない。その手法だ。中身で負けたのではない。正に手法で負けたのだ。正しいだけでは、もはや若い世代の支持は得られない。あくまでも正しさを捨てずに、どう手法を革新すべきか。それを真剣に議論、研究しなければ』

## ●私たちの何が妨害を許してしまったのかなあ？

企業・団体献金によって財界と一体化している自民党金権・腐敗政治を糾すという点でひとつになる。これが「市民と野党の共闘」の神髄です。共闘を構成する市民の側にも野党の側にも、それぞれに大義や個性がありますが、その違いは尊重しあいながら、一致点を掘り出し広げていこう、今回築き上げたピラミッドは、蓮舫さんと「7つの約束」を軸にして「都政を変える」というものでした。しかし、発展途上のピラミッドですから、その足元にはたえず液状化の危うさが付きまといまいます。

「自民党隠し（ステルス作戦）」「あいまいな与党連合」による攻撃が巧妙であればあるほど、私たちの共闘内部には疑心暗鬼も生まれます。「あいまいな攻撃者」を味方と勘違いする、共闘相手の「違い」をことさらに強調する、共闘から離れこれを敵視するなどの気分が醸成されたりもします。こうした「共闘内部の矛盾」は、「一致点」に照らしてたえず共闘を検証し、一緒に行動を重ねて信頼関係を育てあうなかで、克服できるものだと、私は思っていますが、いかがですか？

今回は、共闘の広がりや深まりを「良いところまで」前進させたけれど、くそ！ 時間がたりなかったなあ！ と悔しがっているのは私だけではないよね！ この悔しさを大切にして、新しい段階の「市民と野党の共闘」へ、まずは這ってでも、動き出そうではないですか！ 私の「くりごと」でした。みなさんもどうぞ！